

第13回 東本願寺門前と正面橋界限

万年寺・紅梅天神の謎

本シリーズ第1〜12回で、下京区の堀川以東、六条通以北の地域をめぐるしました。六条通の一つ南の通りは、花屋町通。今回は、下京区で、西は烏丸通、東は鴨川、北は花屋町通（あるいは上ノ口通）、南は七条通に挟まれた区域（下京区の一部）を歩くことにしましょう。

まず、河原町通の西側から。今回の最初は、久しぶりに、和菓子屋。第12回の最後の町名看板「河原町通上ノ口上ル本塩竈町」のあるところから、河原町通を南に下がって、右折。上ノ口通をすこし歩いたところに、和菓子屋都屋（上ノ口通富小路東入ル唐物町）があります。名物は、京風そば餅「都萬寿」。漉し餡、白餡、粒餡の焼餅。もちろん、おはぎ、桜餅など定番の和菓子も。

富小路通に出て北上すると、浄土宗万年寺（富小路通に西面）に出ます。第12回で（新）六条通を通過したときに、その北堀に沿って歩いたことを覚えていらっしやるでしょう。『都名所図会』巻之二では、「万年寺の天満宮」の項があり、「長講堂の南にあり、初めは、問之町万年寺通の南にありしとなり。舊地に紅梅の古木存せり。」とあります。

『京都市の地名』には『京都坊目誌』を引用して、万年寺の旧



仁丹町名看板の所在（東本願寺門前）

地について、「或は云今云万年寺通烏丸の辺にあり」と載せています。現在地へは、天正十九年（一五九一年）豊臣秀吉の京都改造のときに移動。天明の大火、どんどん焼のときに類焼。それ以後に再建して現在に至っています。万年寺の本尊阿弥陀如来は、源義経の念持仏と伝えられています。

『都名所図会』記載の天満宮は、『京都市の地名』によれば、紅梅天神と呼ばれる祠として残っているとのことですが、詳細は



万年寺山門と万年寺本堂



わかりません。このあたりの古図が、石田孝喜『京都高瀬川―角倉了以・素庵の遺産―』、思文閣出版（二〇〇五）の図83（枳殻邸水路図、岡島文書写・部分）として掲載されています。この枳殻邸水路図は示唆に富んだ図です（たとえば、藍染川が間之町通と東洞院通の間を流れていること、内浜の概略がわかることなど）。この図では、万年寺通（現在の花屋町通）が富小路通に突き当たった東側（万年寺の南）に、天満宮が描かれています（なお、この図では、新六条通はもちろんありません）。万年寺本堂前の庭（写真の右手）に、立派な鳥居が現在も残っていますので、もしかしたら、これが紅梅天神の名残かもしれません。紅梅天神は、洛陽天満宮三五社の一つであったのですが、最早、これ以上はわからなくなっています。

万年寺の門前から、東に延びる通りは、かつては万年寺通と呼ばれていました。江戸時代には、六条通の北まで、東本願寺の掘で囲まれていました。万年寺通は、その堀の内側（寺内）を通過して、新町通まで達していました。この通りは、現在、花屋町通と呼ばれています。まずは、六条院小学校の北側、稚松公園に沿って歩きますと、すぐに、町名看板「花屋町通高倉東入升屋町」①が見つかります。



花屋町通 高倉東入 升屋町 ①

少子化の波―六条院小学校の名前が消える

この六条院小学校は、かつての稚松小学校です。少子化の波を受けて、菊浜小学校（第12回で説明した「ひと・まち交流館京都」の場所にあつた小学校）と稚松小学校が統合されて、一九九二年（平成四年）に六条院小学校として、開校しました。ところが、少子化の波はおさまらず、六条院小学校、植柳小学校、崇仁小学校の三校をさらに統合して、二〇一〇年に「下京涉成小学校」が開校する予定になっています。校名は、枳殻邸涉成園に由来し、校地は、枳殻邸の南、元の皆山中学校の跡地。元皆山中学

校も、下京中学校に統合廃止されていて(第6回参照)、時代の流れとはいえ、少子化は、どこまでいったら下げ止まるのでしょうか。「六条院小学校」の名称は、源融の河原院の時代をしのぶよすがとなり、しかも源氏物語にも典拠をもつので、よい命名だとおもいますが、二十年足らずで消え去るのは残念なことです。ただし、すこし離れたところに、六条院公園として「六条院」が残っているのが救いです。「稚松」の名も、とりあえず、児童公園の名称として残ることになります。

一地点に四枚の町名看板

高倉花屋町の四辻を西に歩くと、さらに四枚の町名看板があります。まず北側に二枚。「花屋町通高倉西入升屋町」②と「花屋町通間ノ町東入夷之町」③。一枚の町名看板②と③を写真に収めて、振り返って南を向くと、なんとそこにも、一枚の町名看板。「花屋町通間ノ町東入天神町」④と「花屋町通高倉西入若松町」⑤。

看板②～⑤の町名が、四枚とも異なることに注意。つまり、これらの四枚の町名看板に囲まれて立っているのは、この地点が、升屋町、夷之町、天神町、若松町の接点だということです。升屋町(町名看板①)の町名が、②と同じく「升屋町」であることに注意)と若松町の一組は、高倉通の両側町で、花屋町通を境界にして南北に隣り合っていること。夷之町と天神町(町名看板⑥)の町名が、④と同じく「天神町」であることに注意)のもう一組は、間之町通の両側町で、花屋町通を境界にして南北に隣り合っ



花屋町通 高倉西入 升屋町 ②
花屋町通 間ノ町東入 夷之町 ③



花屋町通 間ノ町東入 天神町 ④
花屋町通 高倉西入 若松町 ⑤

ていること。そして、これらの二組が東西に隣り合っていること。その結果が、この四枚の町名看板に反映されていることになります。「京都の町名の多くが両側町になっているために、向こう二軒と隣がそれぞれに別の町内になってしまつ」という特殊例の一つですが、仁丹の町名看板に反映されて、視覚化されているところがおもしろい。ちなみに、六条院小学校の旧名の「稚松」は、その所在地、若松町の「若松」を雅名としたものと推定されます。

京都の町名の多くが両側町になっていることは、一つの町名を幾通りにもあらわせるという融通無碍な（一方では煩雑な）結果になります。たとえば、上述の夷之町は、「間之町通五条下ル三丁目」、「間之町通花屋町上ル」、「間之町通六条上ル」、「花屋町通間之町西入ル」、「花屋町通間之町東入ル」、「花屋町通東洞院東入ル」、「六条通間之町西入ル」、「六条通間之町東入ル」、「六条通東洞院東入ル」となります。ただし、「間之町通六条上ル」の「六条」は新六条通です。仁丹の町名看板が設置された時点では、旧六条通のみで、新六条通はなかったと考えられますので、多分「間之町通六条下ル」となつたはずで

す。四枚の看板②～⑤がある地点から、花屋町通をさらに西へ。間之町通との四辻を越えたところに、町名看板「花屋町通間ノ町西入天神町」⑥。看板④の「東入」を「西入」に入れ換えた住所です。町名は同じ天神町。町内に「文字天満宮」が鎮座していることに由来しています。



花屋町通 間ノ町西入 天神町⑥

文字天満宮

町名看板④と⑥の天神町は、間之町通の両側町。町名の由来になつた「文字天満宮」（間之町通花屋町下ル天神町）は、間之町花屋町の四辻から南に下がつたところにあります。創建の時期は不詳（本シリーズ第4回参照）。祭神は、菅原道真。天明の大火、安政の大火、元治の大火（どんどん焼）で類焼。現在の建物は、大正七年（一九一八年）の建立。

社伝によれば、多治比文字（道真の乳母と伝えられるが、年齢の点で辻褃があわない）が、天慶五年（九四二年）に、「北野の左近馬場に祠を建てよ」という神託を受けて、とりあえず西京（右京）七条二坊十三町の自宅に祠を祀つたのが始まりとされています。この祠を北野に移して、天曆元年（九四七年）に北野天満宮が造営され、文字の住居跡は、文字天満宮となつたと伝えられています。

ところで、文字天満宮が、右京七条二坊から、現在の地へ移つたのはいつか。これがよくわかりません。『京都市の地名』では、寛永十四年（一六三七年）洛中絵図に「天神町」が載っている



文字天満宮

ので、このころには、文字天満宮が鎮座していたことがわかると
しています。境内の由緒書によれば、東本願寺の創建時に、こ
のあたりが寺領地として組み入れられた際、例外的に寺内での存
続が認められたと伝えられ、東本願寺第二世宣如上人（一六〇四
〜一六五八）が奉納した自筆の神号と名号が現存しているとい
います。

不思議なことに、本シリーズで多用している『都名所図会』と

『拾遺名所図会』には、「文字天満宮」の記載はありません。ま
た、上述の枳殻邸水路図には、藍染川と間之町通が描かれていま
すが、現在の文字天満宮の位置にはなにも記されていません。同
じ図には、万年寺の天満宮の位置に鳥居の印が記載されているの
で、単に記載もれなのか、もう少し調べる必要があります。た
だ、「万年寺の天満宮」の説明（『都名所図会』巻之二）で、「万
年寺の旧地（間之町万年寺通の南）に紅梅の古木がある」と記載
していることが気になります。この旧地というのが、ちょうど現
在の文字天満宮の位置になりますので、もしかしたら、関係があ
るのかもしれません。

ついからですから、「右京七条二坊十三町」を調べてみましょう。
平城京の右京七条二坊は、北を六条大路、南を七条大路、東を西
大宮大路（今の御前通）、西を道祖大路（今の佐井通あるいは春
日通）で囲まれた地域。十三町は、佐井七条の東北の二画（二坊
でいうと西南の一町。今の西七条北月読町・西七条北衣田町の
一部）にあたります。ちなみに、十三町の東、右京七条二坊の三町
（六町（御前七条の西北の四町）を西市が占めていました）。

現在は、御前七条の付近は、七条新千本から七条通に沿って延
びる七条商店街の西のはずれになります。このあたりに天満宮は
ないかと探したら、網敷行衛天満宮（七条通御前上ル西七条北東
野町）がありました。松尾大社の境外末社で、ここにも、多治比
文字の伝承が残されています。

ここよりもずっと北になりますが、「文字天満宮旧址」の碑と
社が上京区天神通妙心寺道上ル北町にあります。ここにあった文
字天満宮は、明治六年（一八七三年）に北野天満宮境内に遷座

し、末社として現存しています。この碑のある旧地は、文字天宮御旅所となっており、文字天満宮祭のとき（四月第三日曜日）には、北野天満宮（正確には末社の文字天満宮）から神輿が渡御します。この付近は、北野天満宮の神人が多く住んでいたところといわれています。とくに、「惣市」と呼ばれる巫女集団があり、文字の後裔として祭祀と託宣を業としていたらしい。

「惣市」あるいは「惣之市」は、九州福岡県太宰府天満宮にも伝承があり、現在もその末裔が、舞を奉納するしきりになっていたりしています。もしかしたら、間之町通花屋町下ル天神町の文字天満宮も、「惣市」の巫女集団に関係があるのかも知れません。あくまでも、わたしの憶測です。

枳穀邸涉成園

文字天満宮から南に歩いて一筋目の東西の通りは、枳穀邸（正式名は、涉成園）の北塀に沿っており、上枳穀馬場通と呼ばれています。同じ通りが、間之町通から西では、上珠数屋町通とも呼ばれます。この通りには、明治の昔、京都電気鉄道の路線が通っていました。明治二十八年の勧業博覧会にあわせてつくられたもので、京都駅から間之町通を北上して、枳穀邸の西北角で、東に折れて、上枳穀馬場通を通り、木屋町通を二条まで北上、岡崎の博覧会会場に至る路線です。

上枳穀馬場通と間之町通の十字路の東北のかどには、内藤傘提灯店。ちよつど折りよく、出来上がった提灯を店頭に干して置いたので、写真に撮りました。



内藤傘提灯店



上枳穀馬場通
間ノ町東入 天神町 ⑦

内藤傘提灯店の二階左端に、町名看板がかすかに写っていることがわかりますか？ 拡大すると、「上枳穀馬場通間ノ町東入天神町」⑦と読めます。

この四辻からすぐ南に、涉成園（下珠数屋町通間之町東入ル東玉水町）の西門が開いています。東本願寺の境内飛地で、周囲に枳穀（からたち）が植えてあったことから、枳穀邸と呼ばれ、こちらの名称のほうが広くゆきわたっています。また、敷地の一边が百間（約百八十メートル）であることから江戸時代には、百間屋敷とも呼ばれていました。この地は、宣如の求めに応じて、徳川家光が寛永十八年（一六四一年）に東本願寺に寄進。承応二年（一六五三年）〜明暦三年（一六五七年）の間に庭園を完成させました。

枳穀邸は、いわゆる観光寺院ではないので、拝観料は徴収しません。が、入口で、若干の志納。五百円以上だと、立派なガイドブックがもらえます。庭は、石川丈山の作庭と伝えられる池泉回遊式庭園。ガイドブックによれば、見所は、*滴翠軒、*傍花閣、*印月池、*侵雪橋、*縮遠亭、*紫藤岸、*漱枕居、*回棹廊、*問風亭、*園林堂、*蘆菴、*亀石井戸、*代笠席、*臨池亭、*高石垣、*頼山陽（一七八〇〜一八三三）の『涉成園記』には、涉成園十三景をあげています。そのなかには、上記のうち*印をつけたものが含まれています。

東山を借景にしているので、「すぐ東の市街地を隠すために、背景の木立を具合よく剪定する作業が大変だろう」と、植木職人の苦勞をいくつか想像してしまいます。西南方向は、無料にも京都タワーがみえますが、これは隠しようがありませんね。名が



枳穀邸（涉成園）西門

知られてきたせいか、とくに紅葉のころは、景色を独り占めというわけにはゆかないけれども、都会の中とは思えない静寂を味わえます。春は、桜の隠れた名所。

『都名所図会』巻之二には、東殿として、鳥瞰図が記載されているので引用します。天明の大火（一七八八年）のときには、類焼を免れていますから、頼山陽の『涉成園記』にある涉成園十三景は、この図にある情景を見て選定したことになります。その後は、なんども火災にあっっていて、引用した鳥瞰図の時代の建物は



『都名所図会』巻之二 東殿（枳穀邸）の図。
（国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用）

残っていません。しかし、池（印月池）や島などのレイアウトは保たれていて、主だった建物は再建されていることは上述の通りです。池の水源は、江戸時代には高瀬川であり、その詳細は、上述の枳穀邸水路図からわかります。それによれば、本シリーズ第12回で紹介した船回し場のところから取水して、印月池を潤したのち、藍染川と内浜に排水しています。明治時代、琵琶湖疏水が開通したときに、本願寺専用の防火用水として分水管を設置した

ので、その水を流用しているとのこと（現在は地下水も併用）。

ここで、涉成園の名前のいわれ。晋の陶淵明（三六五〜四二七）が、任地の彭沢県令を辞して家に帰るときにその決意を述べた辞「ききよひ 歸去来の辞」から「せつじょう 涉成」の語句が採られています。宣如の隠居所としたときには、せつじょう 涉成園のあたりは田畑だったので、「かえりなんいざ 歸去来兮」の気持ちがピッタリだったのでしょう。それにしても、隠居所といっても豪勢ですね。なにせ、御土居や高瀬川を挿げ替えて土地を確保したのですから。わたしも、昨年京都から足柄（神奈川県）に引つ込みましたので、同じような感慨がありますが、隠居所といっても何もかも借景で、貧乏人ゆえにスケールが小さいのは止むをえないところです。同感のついでに、該当の部分引用しておきます。

歸去来兮。

田園將無。胡不歸。

（中略）

引壺 觴以自酌 眇庭柯以怡顏
倚南窓以寄傲 審容膝之易安
園日涉以成趣 門雖設而常閑
策扶老以流憩 時矯首而游觀
雲無心以出岫 鳥倦飛而知還
景翳翳以將入 撫孤松而盤桓
（後略）

『古文真宝選新解』（星川清孝、明治書院、一九五六）

ただし、旧字体を新字体にあらため、「窓」は等価な文字に変え

ました。壺觴は、酒つぼとさかずき。庭柯は、庭の木の枝。「園日涉以成趣」は、「園日々に涉りて、以て趣を成し。」と訓読します。この部分が、「涉成園」の名前の由来です。「寄傲」は、気ままに過すこと。「岫」は、空の穴（多分、仮想的なもの）。「孤松」とあるのは、節を曲げなかった淵明自身の来し方を重ねた感慨。引用した部分の大意は、次のようになります。

さあ、帰ろう。

このままでは、田舎の土地も荒れ果てる。帰らずにはおられない。

(中略)

手酌でひとり飲みながら、見事な枝ぶりを見てほくそ笑む。

南の窓辺でだらしなく、狭いといつても膝を伸ばす余地はある。

日ごと園に出ればよいながめ。門はあるが閉じたまま。

杖をたよりによぼよぼ歩き。休み休んで周りをみまわす。

雲は無心に湧き出して、鳥は飛ぶのに飽きて、家路を急ぐ。

はや日は翳り薄暗く、それでも松を撫でながら、変わらぬ緑に去りがたい。

仏具商の町

枳穀邸の門前から西に延びる通りは、正面通。ここで、町名看板「正面通東洞院西入廿人講町」⑧が見つかります。現在廿人講町と呼ばれているところの西半分は、一七五〇年頃には中珠数屋町とも呼ばれていたらしい。そのため、正面通のこの部分は、現在でも中珠数屋町通と呼ばれることもあります。この町名看板のあるお宅の隣は、寺島念珠老舗（正面通烏丸東入ル廿人講町）。看板の揮毫が堂々としていて、文禄年間の創業以来四百年の風格があります。ほかに、この界限は、仏具商が軒を連ねています。



正面通 東洞院西入 廿人講町 ⑧

中珠数屋町通の名前を載せる町名看板は見つけられなかったのですが、「中珠数屋町郵便局」が東洞院通正面上ル廿人講町にありました。この郵便局は、廿人講町から平成十一年に上珠数屋町に一時移転（仮設）。そのままだったら、「中珠数屋町局が上珠数屋町にあるのはこれいかに」と軽口をたたけるところですが、平成十四年に、また廿人講町（もとは別の場所）に戻ってきています。それにしても、京都は郵便局が多い。すぐ近所（不明門

通六条上ル仏具屋町」にも、「京都東本願寺前郵便局」があります。中珠数屋町郵便局の北、少し歩いたところの向かい側に京扇堂（東洞院通正面上ル筒金町）。天保三年創業の扇の老舗。京都伝統工芸体験工房に登録して、扇子の絵付教室を開いています。

設置時期が特定できる町名看板

正面通にもどって、西へ向かいますと、東本願寺（今は正式には、真宗本廟しんしゅうほんまう）というのだそうです（の前、烏丸通にでます。その直前、平安法衣店の二階部分に、町名看板「正面通不明門東入あけずひがし 廿人講町」⑨が貼ってあります。



正面通 不明門東入 廿人講町 ⑨

仁丹の町名看板⑨の上には、別の町名看板が掲げてありますので、同じ画面に入るように、もう一枚写真を撮りました。二つ

の町名看板を比べると、「下京区」の表示が、左右逆になっていて、時代を感じます。さらには、基準の十字路の表示が、町名看板⑨では、「正面通不明門」となっているのに、もうひとつの看板では、「正面通烏丸」となっているのは、設置の時代背景を示唆しています。

この町名看板⑨は、設置時点が特定できることから、ことのほか重要です。というのは、京都市電烏丸線（烏丸塩小路）烏丸丸太町）の開通は、明治四十五年（一九一二年）。東本願寺を避けるために、線路が東側に凸型に敷設されました。つまり、廿人講町の不明門通以西の民家を取り払われ、烏丸通が不明門通を吸収する形で拡張されたわけです。この跡は、市電が一九七四年に廃止されたあと、現在でも残っています（上珠数屋町通）下珠数屋町通の間の烏丸通）。

町名看板⑨が設置当時の道路状況を忠実にあらわしていると仮定すれば、不明門通がまだ存在していたとき（すなわち、一九一二年以前）に設置されていたこととなります。森下仁丹の記録によれば、町名看板を掲げ始めたのは、明治四十三年（一九一〇年）のことで、大阪、東京、京都、名古屋などの大都市から設置を始めたといえます。したがって、上の仮定のもとに、町名看板⑨は、明治四十三年（一九一〇年）～四十五年（一九一二年）に設置されたと特定できます。もちろん、烏丸通の拡幅後も、不明門通があったことを記念したいというつもりで、町名看板⑨を設置した可能性もありますので、あくまでも仮説です。

東本願寺（真宗本廟）

ここまで来たら、東本願寺（真宗本廟）を取り上げないわけにはゆかない。真宗大谷派の本山。「東本願寺」は通称で、現在の正式名は、真宗本廟と呼ぶらしい。分派した浄土真宗東本願寺派（東京別院東京本願寺を東本願寺と呼んでいる）と区別するため、真宗の寺院は、多くは、御影堂と阿弥陀堂が対になっています。御影堂は、御真影（木造の教祖親鸞上人像）を安置するお堂。高さは、二二間（三八メートル）、幅四二間（七六メートル）で、世界最大級の木造建築。現在、巨大な覆い屋の中で改修工事中です。阿弥陀堂は、本尊阿弥陀如来を安置するお堂。高さは、十六間（二九メートル）、幅二九間（五二メートル）。お参りという形で、中に入ることができます。あくまでも信仰の場所ですから、お静かに。

東本願寺の歴史は、火災の歴史と言ってもよいくらいで、江戸時代に五度の火災（寛延二年（一七四九年）、天明八年（一七八八年）、文政六年（一八二三年）、安政五年（一八五八年）、元治元年（一八六四年））で焼失。その都度建て直されています。現在の建物は、明治二八年（一八九五年）再建。

下京旅館街

正面通の一筋南は、下珠数屋町通です。枳穀邸の南門（多分こちらが正門）が開いた部分は、下枳穀馬場通とも呼ばれています。ただし、枳穀邸自体の所在地表示（下珠数屋町通間之町東入

ル東玉水町）でもわかるように、この部分も下珠数屋町通と呼ばれることが多くなっています。

下珠数屋町通と東洞院通が交叉する十字路の西南かどに、町名看板「下珠数屋町通東洞院東入橋町」^⑩と、「東洞院通下珠数屋町下ル橋町」^⑪が直角に貼り付けてあります。

この十字路のほんのすこし北、西側の壁に「東洞院通下珠数屋町上ル橋町」^⑫があります。三枚とも町名は、「橋町」。さらに一枚、この十字路の南、東側の壁に「東洞院通下珠数屋町下ル館屋町」^⑬があります。東洞院通を挟んで、西が橋町、東が館屋町となっているので、ここだけを見ると、どちらも、東西の下珠数屋町通の両側町になっているようにみえます。しかし、さらに南にゆくと、館屋町は、東洞院通を挟んで東西にひろがっています。本当に、京都の町名はややこしい。

いいわすれていましたが、「じゆず」は通常「数珠」と書きますが、京都の地名では、「珠数」となっています。文字面をみれば、「珠数」のほうが、理にかなっているようにも思えます。もっとも、古文では「ずず」と読むことも広くおこなわれているので、「数珠」でも「珠数」でも同じことです。このあたりの仏具商の町を歩きまわった感じでは、店の名前に入れるときは、「…念珠店」という具合に「念珠」ということが多い。「店」をつけるときは、「念珠店」ですが、「屋」をつけるときは「数珠屋」（または、珠数屋）ですね。なお、「京念珠」「京数珠」のどちららも、京都ブランド（地域団体商標）として登録申請されています。

このあたりには、仏具商のほかに、旅館がたくさんあります。多くは、参拝のための門前宿から発展したものです。もともとは、東

二枚の看板⑩⑪の出現状況



東洞院通 下珠数屋町下ル 橋町 ⑪



下珠数屋町通 東洞院 西入 橋町 ⑩



本願寺の再建時に奉仕のために上洛した信者が地域別に宿泊したので、詰所^{つめしょ}という名で呼ばれていました。現在詰所の名前で営業しているのは、砺波詰所^{とるなみ}（不明門通花屋町下ル高槻町）、伊香詰所^{いかが}（不明門通七条上ル粉川町）など数軒。詰所の名前が残っている旅館の例として、伊香詰所の写真を載せておきます。ちなみに、町名看板⑩と⑪が貼ってある町家は、下京旅館組合の事務所でした。

年金システムと教育システムの再生

下珠数屋町通を東へ歩くと、枳穀邸の南側にです。枳穀邸の西南の一角は、下京社会保険事務所（間之町通下珠数屋町上ル榎

東洞院通 下珠数屋町下ル 飴屋町 ⑬



東洞院通 下珠数屋町上ル 橋町 ⑫





伊香詰所

木町) になっています。年金の申請のときには、何回か通いました。

ここに辿りついたついでに感想。「年金問題」で風当たりが強い昨今ですが、継続的な保守管理に弱い(人と金をかけない)という、日本の風土の悪い面が集中的にあらわれてしまいました。この件にかぎらず、公文書の保守管理に価値を見出さない風潮は、公立の文書館が少ないことなどに典型的にあらわれています。万国博覧会やオリンピックなどの「イベント」を打ち上げ花火のように単発的に開催すればよいというものではないと感じます。

下京社会保険事務所の下珠数屋町通を挟んで南向かいは、元の皆山中学校です。現在は下京中学校に統合廃止されていますが(第6回参照)、上で述べたように、この跡地に新しい下京涉成小学校が発足することになっています。

年金システムと教育システムが揺れているのは、これまで百年

余りの間に先人築いてきた社会基盤が、もはやうまくゆかなくなっている兆候です。再生のために何ができるか？

正面橋

河原町通の最初の場所に戻って、今度は河原町通の東側をめぐることにしましょう。枳穀邸の北堀に沿った上枳穀馬場通と河原町通との十字路、その十字路の東北のかどに、町名看板「河原町通上枳穀馬場若宮町」⑭があります。もう少して落ちそうな風情。



河原町通 上枳穀馬場上ル 若宮町 ⑭

河原町通を南下して、正面通を東に歩きましょう。児童公園をすぎると、高瀬川に架る正面橋にです。高瀬川は桜並木。正面橋付近も、春は見事。

かつての高瀬川水運の「米浜」はこのあたり。「米浜」の名前が

残っているものはないかと古い地図をみると、このあたりに、七条米浜郵便局があるはず。うろろろ探していると、ありました。高瀬川を渡ったところに、七条米浜郵便局(三ノ宮町通正面下ル上三之宮町)。あとで、調べてみると、平成十二年に、正面通西木屋町西入ル八王子町から現在のところに移転しており、古い地図の記載は間違っていないませんでした。

三ノ宮町正面の十字路の東北のかどに、京都の古い町医のお宅に設けられた「眼科外科医療器具歴史博物館」(正面通木屋町東

仁丹町名看板の所在(正面橋界限)



入ル鍵屋町)があります。平成十三年より、奥沢眼科・竹井外科に伝えられた江戸時代からの医家道具や奇贈をつけた多くの医療機器を展示しています(予約が必要)。

正面通の同じならびに、洋館風の重厚な玄関があります。ここは、山内任天堂。「アムレツ・ピクシ」の表札が面白い。洋は左から和は右から。もともとは、花札・トランプ・麻雀牌・百人一首の製造販売元で、いまは、任天堂 Nintendo ブランドのゲーム機は、世界を股にかけて、飛ぶ鳥を落とす勢い。鳥羽街道を経て現在の南区に本拠を移したあとも、創業地の社屋が残っています。現在は、関連会社が入っているらしい。

任天堂の対面(とてめん)に(麻雀牌に敬意をはらって)、町名看板「二ノ

高瀬川正面橋



鴨川正面橋(比叡山を望む)





山内任天堂の旧社屋

宮通正面上ル鍵屋町」⑮が貼ってあります。

この看板から、東はすぐ鴨川。正面橋が架っています。正面橋で、比叡山を遠望した写真を撮りました。この正面橋は、鴨川を斜めに横断しています。豊臣秀吉が作った方広寺大仏殿の正面を基点とする通りだから正面通。

高瀬川に架る正面橋から、木屋町通を南へ、松井天狗堂（木屋町通正面上ル十禅師町）があります。手摺りの花かるた（花札）・百人一首を製造販売。手摺りの工程から手仕事で製造しているのは、日本でここだけ。



二ノ宮通 正面上ル（鍵屋町）⑮

六条河原・七条河原・八条河原

六条河原から下流の鴨川河原は、古くは、刑場として使われていました。『平家物語』長門本（国書刊行会、日本文学電子図書館 J-TEXTS, <http://www.j-texts.com/>）巻第十六では、次に示すように、六条河原で木曾義仲の首が、義経から検非違使に渡されたあと、晒し首になったことが記されています。

廿六日、伊予守義仲が首渡さる。法皇御車を六条東洞院に立て御覽せらる。九郎義経六条河原にて検非違使の手へ渡す。検非違使是を請取て、東洞院大路を渡して左の獄門の前の棕の木にかく。首四あり。伊予守義仲、郎等には高梨六郎忠直、根井小弥太幸親、今井四郎兼平也。樋口次郎兼光は降人也。

ところが、鎌倉幕府の公式記録『吾妻鏡』第三『全訳吾妻鏡』第一巻、貴志間正造訳註、新人物往来社、一九七六）、寿永三年（一一八四年）正月廿六日の条では、場所は七条河原となっています。

丙辰、晴。今朝、檢非違使等七條河原において、伊豫守義仲ならびに忠直、兼平、行親等が首を請け取り、獄門の前の樹に懸く。また囚人兼光、同じくこれを相具して渡されをはんぬ。上卿は藤中納言、識事は頭辨光雅朝臣と云々。

多分、ここまでが六条河原でここからは七条河原というような厳密な境界はなかったであろう。

八条河原というのも出てきます。一の谷の合戦で、源氏が大勝したあとの平家の処分。『吾妻鏡』第三、寿永三年（一一八四年）二月十三日の条に、

平氏の首、源九郎の六條室町の亭に聚む。いはゆる通盛卿・忠度・經正・教經・敦盛・師盛・知章・經俊・業盛・盛俊等の首なり。しかる後に皆八條河原に持ち向ふ。大夫判官仲頼以下これを請け取り、おのおの長鎗刀に付け、また赤簡（平某の由、おのおのこれを注し付く。）を付けて、獄門に向ひての樹に懸く。観る者市を成すと云々。

源九郎は源義経のこと。

さらには、壇の浦の合戦のあと、平宗盛父子の首を六条河原にさらすという記事も出てきます。『吾妻鏡』第三、元暦二年（一一八五年）六月廿三日の条に、

甲戌、前内大臣ならびに右衛門督清宗等の首、源廷尉の家人等、六條河原に持ち向ふ。檢非違使大夫尉知康・

六位尉章貞・信盛・公朝・志明基・府生經廣・兼康等、その所に莅みてこれを請け取り、獄門の前の樹に懸く。（後略）

義経と頼朝の不仲が昂じて、土佐坊昌俊が、義経を討つために京都に遣わされます（第11回）。「堀川夜討」に失敗した土佐坊昌俊も、六条河原で首をはねられます。『吾妻鏡』第五、文治元年（一一八五年）十月廿六日の条に、

乙亥、土佐房昌俊ならびに伴黨三人、鞍馬の山奥より、豫州の家人等これを求め獲て、今日六條河原において梟首すと云々。

という記述があります。

さらに、『吾妻鏡』第六、文治二年（一一八六年）二月一日の条に、

今日、北條殿、六條河原において、群黨十八人の首を刎ぬ。およそかくのごときの犯人は使廳に渡すべからず。直に刎刑に處すべきの由と云々。

すでに源義経は敗れて、京都から逃亡しています。北条時政が京都に来て采配を振るっていますが、この記事から、治安が乱れていることがわかります。「直に刎刑に處すべきの由」という強い表現は、この処刑が見せしめの処刑で、治安の乱れの原因が鎌倉方の武士によるのではないことを示すためでしょう。

時代は下って南北朝、楠木正成の挙兵。元弘元年（一一三三年）に笠置城が落城して、捕らえられた者が死罪になったのも六

条河原。『太平記』(国民文庫刊行会)、流布版本、翻刻)巻第四の「笠置囚人死罪流刑事。付藤房卿事」のところに「EXITIS(日本文学電子図書館 <http://www.j-texts.com/>)から引用しました。訓点読みがなは、わたしが仮につけたもの。まちがっていたら、「」容赦のほど。

笠置城被_レ攻_レ落_レ刻_レ被_レ召_レ捕_レ給_レし人々の事、去年は歳末の計会に依_レて、暫_レく被_レ閻_レぬ。新玉の年立回れば、公家の朝拜武家の沙汰始りて後、東使工藤次郎左衛門尉・二階堂信濃入道行珍二人上洛して、可_レ行_レ死_レ罪_レ人々、可_レ処_レ流_レ刑_レ国々、関東評定の趣、六波羅にして被_レ定_レ。山門・南都の諸門跡、月卿・雲客・諸衛の司等に_レ至_レ迄、依_レ罪_レ輕_レ重_レ、禁獄流罪に処_レすれ共、足助次郎重範をば六条河原に引出し、首を可_レ刎_レと被_レ定_レ。

正面橋を渡った対岸になりますが、元和キリシタン殉教の碑が残っています。これは、江戸時代初期。元和五年(一六二二年)、二代將軍徳川秀忠の命により、六条河原で、五二人のキリシタンが火あぶりにされ、殉教しました。

勝者が敗者を断罪するのは、時代の変わり目の常。一くりに罪人といっても、時代が変わったための犠牲者です。

高瀬川水運—内浜

枳穀邸の南塀に沿った通りの延長上に、「河原町通下枳穀馬場東入(納屋町)」^⑬があります。雨樋の陰に半分隠れていてわか

りにくいうえに、町名の部分に錆がきて、判読がむずかしい。目を凝らすと、「納」の傍の「内」が見えますので、町名の「納屋町」を補うことができます。



下枳穀馬場通
河原町東入 (納屋町) ^⑬

河原町通は、枳穀邸の東塀に沿うように南北に走っています。その東側の高瀬川も同様です。これは、枳穀邸を建造するときには、流路を変更したため。枳穀邸の建造当時には、御土居が枳穀邸の敷地(印月池)を斜めに横切っており、高瀬川も御土居に沿って流れていました。御土居と高瀬川を東へ追いやって、枳穀邸の敷地を確保したというわけです。壊された御土居の一部は、枳穀邸庭内の築山に利用されているといえます。

枳穀邸の南、七条通の北側に沿って、江戸から明治を通じて、東西に細長く「内浜」と呼ばれる舟入がありました。なぜ内浜と呼ぶかというと、これが、御土居(枳穀邸建設による移設後)の内側にあつたからです。ほかに船廻場として、米浜、富浜などがありました。いずれも御土居の外側です。内浜は、高瀬川の水運が盛んなころには、船溜場や貯木場として利用されていました。今は埋め立てられて跡かたもありません。

ここで、内浜がいつごろ埋め立てられたかを調べてみましょう。

七条間之町から間之町通を北上していた木屋町線が、明治三四年（一九〇一年）に、七条内浜（現在の七条河原町）経由となりました。明治四二年（一九〇九年）の二万分の一地形図（京都南部）(<http://kinseijin.dyn dns.org/map/odoi/odoi-shiokoji.html>)では、内浜に橋が架っており、この橋を線路が通っていることがわかります。この時点では、内浜は埋め立てられていません。一方、市電七条線の七条河原町～東山七条の開通は、大正二年（一九一三年）ですから、おそらく大正元年（一九一二年）ごろ、市電を通すために七条通の拡幅がおこなわれ、その際に内浜が埋め立てられたようです。十年余りのちの大正十一年（一九二二年）の二万五千分の一地形図（京都東南部）では、すでに内浜はなくなっています。

内浜の名残は、現地の町割の中にわずかに残っています。七条土手町の十字路東北に、細い鉤形の路地に囲まれた一画があります。これが、内浜の東端に相当するとみて間違いないでしょう。この推定は、上述の積穀邸水路図や明治四二年（一九〇九年）の二万分の一地形図（京都南部）でも確かめることができます。これらの図によると、土手町通は内浜に突き当たって、七条通には達していません。内浜を埋め立てたときに土手町通を七条通まで延ばした結果、この鉤形の通路（内浜の東北端に沿った通路）が残されたこととなります。この鉤形の部分と西木屋町通（高瀬川）の間に、御土居（積穀邸建設による移設後）があったこととなりますが、もちろん跡かたもありません。

また、塩小路通河原町西入ルに高瀬川の流路がありますが、そのすこし北側。東に曲がった流路とは別に、西側に入る道があり、

北上すると七条通に達しています。この道が、内浜に通ずる流路のあとです。内浜の付近には、材木町や納屋町などの町名が残っていますが、その名残です。とくに材木町がやけに広いのは、内浜の全域を覆っているからです。



プロフィール

藤田眞作（ふじたしんさく）。一九四四年（昭和十九年）北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所 (<http://xyntex.com>) を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第13回）2008/07/13
 © 2007, 2008 藤田眞作 <http://xyntex.com>